学位被授与者氏名	藤丸 昌枝（ふじまる まさえ）
論文題目	『アン・ハッチンソンとピューリタンの宗教思想』 −神とどのように向き合うのか？魂の平和を追及したある女性活動家のその生涯と思想−
論文審査結果の要旨	本論文の成果は、公刊された裁判資料とマサチューセッツ植民地総督の日記を使用し、藤丸氏自身の立場で、ハチンソンの実像に迫ったことである。著名であるもののハチンソンの研究はそれほど多くない。自由を体現した人物としてフェミニストの立場から論じたものが散見されるが、その思想を分析したものは実のところ少ないのである。こうしたハチンソンの宗教的位置づけを手堅くまとめた点が、本論文の成果である。 ただし、問題も多い。第一にボストンの市民生活についての描き方で荒さが見られる。邦語の研究書を中心に描かれているが、アメリカの研究書を用いて多面的に描けば、より厚みがでたと思われる。第二に神学について依拠した研究書が J・モローンの政治分析であるが、英国のピューリタニズムがアメリカ大陸に渡ってどのように変化したのか、研究史の整理をもう少し丹念に行えば、より多くの論点が浮かび上がり、議論に幅がでたと思われる。具体的に言えば、ボストンの公定教会が民主主義の基礎になったのか、それとも民主主義の敵となったのかは、今日でも論者によって意見の分かれるところである。また、ハチンソンが総督との対立の中で、政教分離を進めようとしたのかどうかも、解釈のポイントとなろう。こうした点について、本論文では、立ち入った議論がなされていない。資料である裁判記録等をもうすこし読み込んだうえで、研究史整理に基づいた論点と重ね合わせれば、より意義のある論文に仕上がったと思われる。 以上のような問題があるもものの、従来、自由の闘志として英雄視されていたハチンソンの宗教的保守性を明らかにした上で、ウィンスロップ総督や J・コットン牧師らとの関係を明らかにした功績は大きい。ハチンソンの足跡を植民地初期の文書から追ったことを積極的に評価したい。 口頭試問において不適当な点も見られたが、おおむね的確にこたえることができた。この結果、論文の評価と併せて合格とし、また評価を A とした。